「土人発言」をかばう　この国の空気とは

表題は毎日新聞 12 月 2 日夕刊「特集ワイド 続報真相」。リードから―暴言の背後に差別意識があったと認めることが、そんなに難しいことなのか―。沖縄の米軍施設工事に反対する市民に、現地派遣された大阪府警の警察官が「ぼけ、土人が」と罵倒したことに対する安倍晋三政権の対応のことだ。閣僚や政府答弁は「差別と断定できない」と繰り返す。どこか差別を容認するかのような空気ではないか。この社会の深層に何があるのだろう。

写真は菅義偉官房長官と鶴保庸介沖縄・北方担当相。米軍ヘリコプター離着陸帯(ヘリパッド)に配備が進む新型輸送機オスプレイと、ヘリパッド建設に抗議する市民と整列して壁を作る機動隊員 = 沖縄県東村高江で 10 月 27 日

哲学者で東大教授の高橋哲哉さんは「差別と断定できないという方が理解に苦しみますが、政府としては差別と認められない理由がある」と見る。

「日米安保条約は基地の存在と米軍駐留が前提です。だから安保の『恩恵』を受けるには日本全体で基地を負担すべきなのに、沖縄に過重な負担を押しつけ、沖縄の民意を無視して米軍の新基地や施設の建設を強行している。政府がやっていること自体、差別の上に成り立っていることを認めることになるからです」「本土の 1 億 2000 万人超は無視できないが、沖縄の 140 万人は無視していい、痛くないという意識があるとしか思えない。少数者を無視し、排除する構造こそ、差別と呼ばれるものです」

沖縄出身の芥川賞作家、目取真俊さんは「土人発言」を世に広めた人物。目取真さんが高江で抗議活動中、目の前で起きた警察官の発言をビデオに捉えていた。「戦争や米軍占領下の沖縄で何が起きていたかを知る政治家がいなくなり、永田町、いや社会の空気が変わったのは事実です。沖縄の歴史への無知を恥じない、無関心な政治家も増えました」

その責任はメディアにもあると、作家の目には映る。言葉に対する感性、差別への拒否感も鈍麻したというのだ。「問題を突き詰めれば沖縄に負担を強いる差別の政治構造、安倍政権のあり方に行き着く。でもそこをメディアは触れたがらない」

政府や公権力が、抵抗する市民を罵倒し差別し、社会がそれを後押しする。この悪夢は、すでに沖縄で現実となっている。それでも無関心でいられますか。

（2016 年 12 月 14 日）